

TOPIC

東日本大震災から15年 “守る未来”へのステップ

2011年3月に発生した東日本大震災。同年からオイスカは、宮城県名取市で被災農家を中心とする「名取市海岸林再生の会」と共に、「海岸林再生プロジェクト」を開始。以降、地元林業事業者と全国のボランティアの力を得ながら、強い海岸防災林を再生する取り組みを今日まで継続しています。育てた苗を植え、それがさらに生長していく過程で、プロジェクト地やその周辺の街並みも復興に向けて少しずつ変化するだけでなく、震災の経験を通して、日頃から災害に備えることの大切さも、被災地を中心に発信されるようになりました。“被災”から“復興”、そして“防災・減災”へ。震災から15年経つ今、“守る未来”へ向けた意識の高まりと、プロジェクトのこれまでのを紹介します。

海岸林再生プロジェクト全景 (2025年5月)

協定面積 103.05ha

年代別
植栽地

2019・20年

2015年

2014年

2016年

2017年

2018年

2020年10月に復旧し、再オープン。屋上からは海岸林を見渡すことができる

名取市サイクル
スポーツセンター

仙台空港

プロジェクトの
重要拠点!

オイスカ
名取事務所



2014年植栽地



2014年に植えた最初の植栽地のマツ(上写真)は最大9mと見上げるほどになり、樹高の計測も一苦労。15~20年にかけて植えたマツも順調に生長し、上空からその様子がよく見て取れる



被災から復興へ

海岸林再生プロジェクト 第1次10ヵ年計画(2011-20)

「海岸林再生プロジェクト(以下、プロジェクト)」の現場、宮城県名取市のクロマツ海岸林は、仙台藩初代藩主伊達政宗が領内への造林を命じたことに始まると伝えられ、以降何度も植え直されながら、潮風や飛砂、春から夏にかけて吹く冷たく湿った風「ヤマセ」から、後背地の人々の暮らしや農地を守ってきました。そんな中、2011年3月11日、マグニチュード9.0という日本国内観測史上最大級の地震が発生。この地震による津波は岩手県、宮城県、福島県を中心とする8県の広範囲に大きな被害を及ぼしました。東北各地の海岸林も、被害面積が3660haと甚大で、400年の歴史ある名取市の海岸林も、壊滅的な被害を受けました。



被災直後の名取市海岸林。奥に仙台空港が見える

国や県、市との協定、林業専門家の協力、そして地元農家の方々の理解を得て、クロマツの苗木づくりから植栽、その後の保育、管理までを行う長期プロジェクトを始動させました。11〜20年までの10ヵ年を一区切りとし、被災農家を中心に結成された「名取市海岸林再生の会」との連携のもと、海岸林100haの再生、50万本の苗木の生産、10億円の資金確保を目標としました。植栽地には、「強靱な防災林」の役割を果たせるよう、マツが地中に深くしっかりと根を張るための工夫として、国が盛り土を施工。この植栽基盤が造成された場所に、オイスカは14年から植栽を開始し、20年度末までに作業道や防風

被災地から世界へ 防災意識の高まり

こうしてプロジェクト最初の10年が積み重ねられる中、災害の傷跡を色濃く残しながらも、周囲の環境も少しずつ整えられていきました。宮城県内においても、大津波に備える多重防壁(防潮堤の背後に、防災林やかさ上げ道路などの減災機能を持つ施設を配置することで、その内側の居住地を守る)や居住区の高台・内陸移転など、さまざまな対策のもと、災害に強いまちづくりが進められました。

さらに仙台市は、被災の経験と再生を世界に発信するため、震災からわずか2ヵ月後に国連防災世界会議の誘致を表明。その後2015年に、第3回会議が仙台市で開かれ、国連加盟国185カ国からの代表団6500人以上が、力

暮らしの中で備えよう
日々の防災意識が命を守る!

「はなちゃんとひなんくんれん」
さく・え ものえまいこ/河北新報出版センター/B5変型判/1500円(税別)

名取市出身で、防災士の資格を持つものえまいこさんによる、親子で読む初めての防災読本。お母さんと小さな女の子はなちゃんが、おうちで避難訓練にチャレンジする内容で、防災グッズや避難時の行動など、ご自身の被災経験をもとに「もしもの時どう動くか、どう備えるか」をイラストで分かりやすく伝えています。プロジェクト地にもほど近い、名取市震災復興伝承館でも販売されています。

購入はこちら

作者のものえまいこさんは、イラストレーターicoとしても活躍。「海岸林再生プロジェクト」の広報イラストなども手掛けています!

強く復興する東北地方の様子を確認しました。また、会議の成果として採択された「仙台防災枠組2015-2030」では、震災の教訓も取り入れられ、新しい災害リスクを防ぐとともに、既存の災害リスクへの多角的な減災対策を進め、多様なステークホルダーが協力して社会のレジリエンスの向上を目指すことなどが決められました。そして、その成果を測るため、災害による死亡者や被災者の減少など、世界規模の具体的目標が初めて設定されました。かつての被災地が災害に強いまち



震災の経験を防災につなげる取り組みとして、「仙台防災未来フォーラム」も開催されている。そのプログラムの一環として、昨年オイスカの担当スタッフもトークイベントに登壇した。今年も参加予定

づくりの現場となり、さらに災害復旧だけでなく防災・減災にも重点を置いた新しい方針を世界へ発信する拠点となつていきます。

※国連主催の国際的な防災戦略を策定する会議。第1回(1994年)は横浜、第2回(2005年)は神戸といずれも日本で実施された

強い防災林をつくるために

海岸林再生プロジェクト
第2次10カ年計画（2021-30）

被災地が防災モデルの拠点へとあゆみを進めるとともに、プロジェクトも全ての植栽を2020年に完了。21年からは、より強い防災林に育てるためのクロマツ林の保育・管理を中心とした、第2次10カ年計画がスタートしました。その主な活動を、2つのポイントに絞って紹介します。

① 強くするために伐る！ 本数調整伐

自然災害に負けず、あらゆる機能をしっかりと果たす強靱な防災林をつくるには、一本一本がより高く、太い幹で、豊かな枝葉を備え、より深く、広く根を張ったマツを育てなければなりません。苗木が小さいうちは、互いに潮風などから守り合って生長するのにある程度の密植が必要です。しかし大きくなるにつれて、隣り合うマツの枝が重なり合うことで陽の当たらない下枝が枯れ上がりすぎるだけでなく、周囲のマツ同士の根が生長を



伐ったマツを林外へ運び出すのも重労働。このマツは国、県の負担のもと、再利用される

阻害してしまいます。これを抑え、強いマツにするためには本数調整伐（間伐）が不可欠とし、21年に試験伐採を実施。「一伐二残（一列伐って2列残す）」、伐採率33%の間伐が最適との考えのもと、22年から宮城中央森林組合や松島森林総合、ボランティアの手で段階的に本数調整伐が進められました。そして昨年、全植栽地の95%が終了。これを1巡目とし、この先数十年かけて、植栽時の1haあたり5000本から8000〜10000本へと減らしていくこととなります。

開始当初は、伐採の進め方や伐採率など、行政や専門家にとっても最適解がない中での実施でした。オイスカではほかの被災海岸林に先駆けて作業を進め、伐採率の異なる試験地におけるデータを収

② クズとの闘いと ボランティアの力

集・蓄積しています。これらが将来、ほかの現場でも役立てられればという思いで、活動が続けられています。

プロジェクトではボランティアを林業作業員の役割を補完する「戦力」として考え、下草刈りやツルマメの抜き取り、溝切り（排水溝づくり）などのさまざまな作業を、全国からのボランティアと共に行ってきました。特にコロナ禍前後から勢力を拡大した「クズ」の除去にボランティアが力を発揮。クズは、アメリカで「グリーンモンスター」と呼ばれるほど旺盛に繁殖し、巻き付いたほかの植物を枯らしてしまう植物です。林内への侵入を防ぐため、林業作業員が植栽地の周囲に薬剤を散

海岸林再生プロジェクト 第2次10カ年計画のあゆみ

プロジェクトの活動

全体の動き

第2次10カ年計画 スタート！

● 本数調整伐（間伐）試験開始
● コロナ禍で年間ボランティア数が約1800人から313人に減少。クズ繁茂が深刻化

2021年

● 令和2年度「森林・林業白書（林野庁）」でプロジェクトが紹介される
● プロジェクト発足10年を記念し、名取市海岸林再生の会が石碑建立

メディア等での紹介300回突破！

● 本数調整伐（2014年植栽地／10・13ha）実施
● 年間ボランティア数が868人まで回復

2022年

● 「水利科学」（日本治山治水協会）に「名取市海岸における海岸林再生植林等の取り組み―実行方法と生育状況―」掲載（オイスカ名取事務所統括 佐々木廣一著）

● 本数調整伐（2015年植栽地／14・53ha）実施
● ボランティアによる本数調整伐を初めて実施。作業前の安全講習も開催

2023年

● タイ・ラノン県マングローブ植林プロジェクトの漁村住民21名の研修受け入れ



● 雇用数延べ1万人突破



名取市海岸林から海外へ！ 広がる防災・減災の森づくり



スタン

オイスカインドネシア
マングローブ植林プロジェクト
調整員補佐
(カラングニアル研修センターOB)

私は中部ジャワ州スラマン県を拠点に、ジャワ島北岸の7県3,500haのマングローブ植林プロジェクトの調整業務と、ドローンを使ってマングローブの生育や高潮の被害状況を把握し、正しく植林が進められているか確認する仕事を担っています。沿岸地域では、地盤沈下や海岸浸食で住民たちの生活が脅かされており、各現場の調整員たちと共に、植林で内陸の人々の暮らしや自然を守ろうと、日々格闘しています。

海岸林再生プロジェクトの現場を訪れたのは、2019年、オイスカの各国の植林プロジェクト責任者が集まる「Eco-DRR※研修」に参加した際のことでした。そこで、名取市海岸林の長期的な保育技術をはじめ、各地の防災・減災にかかる造林の現場を実際に見て学ぶことができ、その経験が今のモチベーションとなっています。

マングローブ林を未来につないでいくため、ほかの調整員やさらに若い世代にも、日本の森林再生や沿岸防災技術を学び、体験する機会を持ってもらいたいと思います。



名取市海岸林の現場では、多くのボランティアと共にツルマメ除去の作業も体験した

※Eco-DRR
森林など生態系を活用した防災・減災

布し、ボランティアは鎌と希釈した除草剤入りの醤油差しを手に、林内に分け入って活動します。マツの硬い枝葉や、それに巻き付いて緑の壁のようになりびっしり伸びたクスノキの間に身をねじ込み、その根元を切って除草剤を塗布する、過酷で果ての見えない作業です。それでもボランティアの足は途絶えることなく、協定区域100haの約25%に侵入したクスノキの繁茂を最小限に抑えることができています。

これまで、約1万7千人のボランティアが活動に参加し



マツを覆うクスノキを除去していく(2025年9月)

ました。この活躍がなければ、現在の海岸林の姿はなかったと言えます。

震災から15年。プロジェクトは少しずつ成果を上げながら、防災を実現する「守る未来」へと進み続けています。第2次10カ年計画は後半戦に入りましたが、海岸林の再生には、なお長い年月がかかります。間伐やクス対策、この数年に発生した病虫害への対応など、多くの人手を要する課題も続く中、かつての被災地が防災発信の拠点となっているように、プロジェクトを通して広く次の世代に防災林の意義を伝え、海岸林が将来にわたって人や暮らしを守る存在となるよう、引き続き取り組みんでいきます。



病気のマツは枯れて、色が変わっている

- 本数調整伐(2018年植栽地/16.1ha)実施
- 全植栽地の1巡目の間伐95%が終了。年間ボランティア数が1276人に回復
- 協定区域内でマツ材線虫病を初めて確認。行政と連携した対策が急がれる



- マツケムシが異常発生
- 本数調整伐(2016・17年植栽地/22.78ha)実施
- ボランティア数延べ1万5000人突破

2025年

2024年



石碑が完成！
バンザイ！

寄附総額10億円突破！(助成金含む)

● 「山林(公益社団法人大日本山林会)に『最強の海岸防災林(宮城県名取市)再生への挑戦』掲載(プロジェクト担当部長 吉田俊通著)

● 仙台防災未来フォーラム2025で発表



活動報告会開催300回・参加者4万5000人突破！

● 宮城県より「令和6年度森林づくり・木づかい表彰」を受ける



● 「松がつなぐあした」(小林省太著)増補改訂版刊